

国立国語研究所学術情報リポジトリ

On the 1604 Edition of Setuyôsyû (Dictionary of Chinese Characters)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 廣濱, 文雄, HIROHAMA, Humio メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001721

廣 濱 文 雄

慶長九年本という名は、奥書によった。筆者名の部分に虫喰があって、不完全なものであるが、筆者は、名舜（と読んだのであるが）という何か僧侶らしい感じがする人である。仏家人名辞典や、その他の人名辞典の類にあたってみたが、その人の名は見付らなかった。

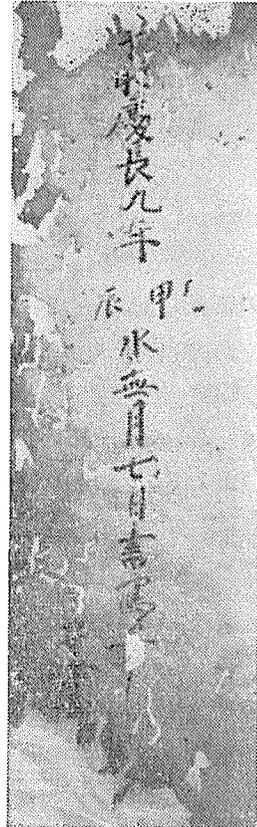
筆者について、どうも素性がわからないので、筆写の時を以て命名したのである。

この本は、国立国語研究所の所蔵である。縦70センチ、横21.3センチの大本で、浅葱色の表紙は、後人が修補の際に付け替えたものである。だから、最初には付いていたであろう題簽はない。

「節用集」の名は、第五丁表に書いてある。

イから始り、ヲまでの零本である。しかし、カの一部が、いわば下書きといった体裁で付け加えてあるが、ここは虫喰の部分が多い位である。イからヲで一冊になっているというのは、他に類を見ない分け方である。

そこで、まったく空想めいた考で、この分け方を理由づけてみた。いろは歌を、俗間に行われているような意味づけをして読んでみると、いろはにほへとちりぬるを」わかよたれそつねならむ」うるのおくやまけふこえて」あさきゆめみしゑひもせす」となる。（「四声開合抄」のアクセントなどその参考となるであろう）。この区切り方を、これが四冊本であ



（奥書）

ったかもしれないことに関係づけて考えたいのである。そうすれば、この区切り方は四冊本であったということの一つの拠りどころとなるろう。

装幀は、袋綴り仕立てになっている。

墨付き45丁である。

第1丁表は、

以下の引用は、すべて原文の縦書きを、横書きにする。上のルビは、原文では右側にある。下のルビは、左側。

三井家

カサ カサフタ カタネ カツケ ガイビヤウ—
瘡 痂 癖 脚気 咳病 氣

官名 掃部一ノ頭守官
令一ノ助 勘解由 主計頭度支郎

上達部工卿又
月卿 監寺僧ノ官

畜類 鷗日本所謂
都鳥者乎 白鷗 雁馬也 鴻大也 鴨鳧 鴈鴨 鴈(下略)

のように、カ部の病名門の終りから始り、畜類の一部に及んでいる。

同裏は、

蟪蛄 蝸 蟹 蠣 蛙 (下略)

と、畜類の語が続いている。

第2丁は、表裏とも、

筆トガウシ一スイ毫紫毫吐花月毫翠松

墨ザンラン一松葉天雨玉后玄雲松心ヘンチン烟媒青松

硯クワン トウリウ タン一貫花洞竜瓦端東海石金石右亀首

紙セイ一藤皮青雲百鹿ロクシニウ綉花白露

のような異名集がある。ただ、最後の

魚異名 ヘイダクワケントシツヤウギンタク白萍臥剣呑舟銀刀

△青陽春天 朱明シユメイ 夏天 白藏サウ 秋天 玄冬冬天

の体裁は、他の部分とは違っている。他の異名集からとってきて、付け加えたものらしい。

第3丁表裏と第4丁表までは、これと同じ異名集がある。やや語の順序が入

れ替っていたり、右側にあるかなが違っている程度の差はある。例えば、流浮の、リヨウフがリウフに、呑舟の、トンシヤウがドンセウになっているといったものである。

第4丁裏は、右上に、

自伊至遠

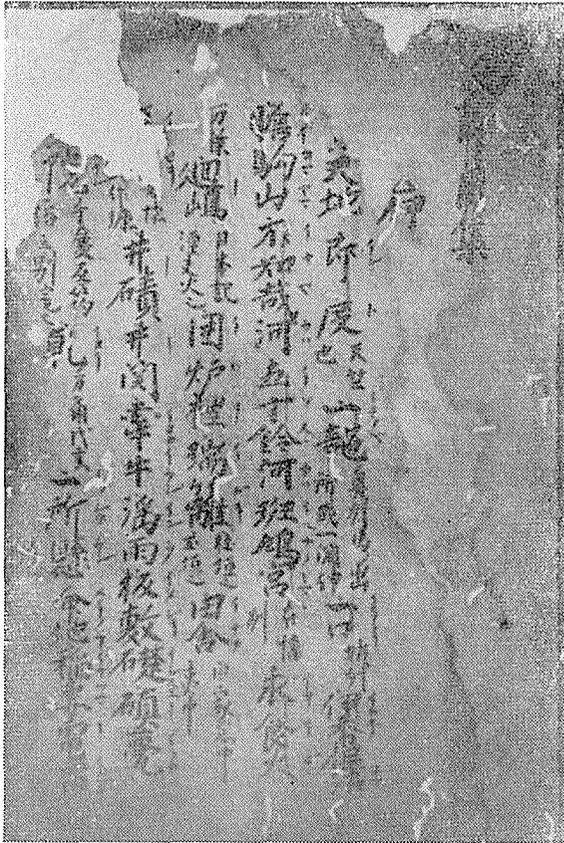
と記してあるだけ。

第5丁表は、右の写真にあるとおりで、ここから本文が始まっているのである。

本文は、第44丁表まで続き、同裏は、奥書（前掲の写真）がある。

第45丁は、右の写真の第5丁と同じであるが、かなは無い。下書なのであろう。

以上を通観して、第3、4丁は、第4丁裏に註記があるから、付録と考えると、第2丁は、付録の下書き、第1丁もカ部の下書きの一部と考えよう。



(第5丁表)

そうなると、この本は第3丁の付録から始ることになるが、それにしては、筆一兔毫紫毫……でとつぜん始るといのは、なんとも落着かない。付録が前に付くという点については、上田萬年・橋本進吉両博士の『古本節用集の研究』（以下『研究』と略称する）133 ページに、「節用集には必ず附録があって本文の後、時としては前に、多少の事項が附載してある」とある。

門数は、別に掲げた表のとおりである。天地・時節・草木・人倫・人名・支

躰・官名・畜類・財宝・食物・言語・数量・銭数の十三門である。

このうち、銭数は、イ部だけにあり、

慶長九年本節用集門名一覽

	伊	路	葉	耳	暮	辺	登	遅	利	奴	留	遠
穴地	○	○	○	○ 1	○	○ 1	○	○	○	○ 1		○ 1
時節	○		○			○ 2	○	○	○	○ 2		○ 2
草木	○		○	○ 2	○	○ 3	○	○	○	○ 3		○ 3
人倫	○	○	○	○ 3	○	○ 4	○	○	○	○ 4		○ 4
人名	○	○	○	○ 4	○	○ 5	○	○	○	○ 7	○ 2	○ 5
支肱	○	○	○	○ 5	○	○ 6	○	○				○ 7
官名	○	○	○			○ 10	○	○	○	○ 5		○ 6
畜類	○	○	○	○ 7	○	○ 7	○	○	○	○ 6	○ 3	○ 8
財宝	○	○	○	○ 8	○	○ 8	○	○	○	○ 8	○ 1	○ 9
食物	○	○	○	○ 6	○	○ 9		○				○ 10
言語	○	○	○	○ 9	○	○ 11	○	○	○	○ 9	○ 4	○ 11
数量	○		○	○ 10					○			
銭数	○											
註			食物の次 に門名なく （葉名也）									人倫を 人名と書 き誤る

○印は、その門がある。数字は門の順序を示す。数字のないものは上からの順。

銭数 博文録

- 一 丁コウ 二 示 三 王 四 罪 五 吾 六 夾 七 皂 八 分
不句 不小 不直 不非 不口 不人 不自 不刀
- 九 丸クワン 十 針セン
不点 不金

となっている。前掲の写真と比較してみればわかるように、△印がなく門名の

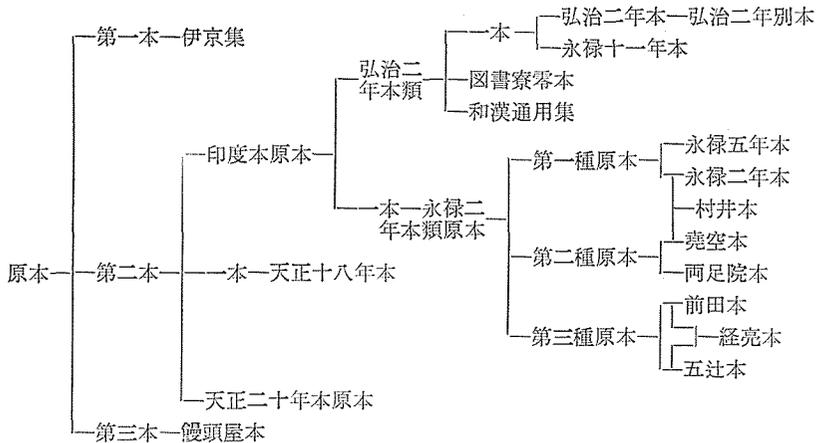
書き方は他と違っている。『研究』189ページの、「弘治二年本類には附録になっているこの部分を、本文の中に入れて、銭数門を新しく作っている本がある。」という説明も、外見上の、体裁の不統一からうなずける。

ついでに言う。数量門は、イ・ハ・ニ・リ部だけにある。まず、イ部は、
 △数量壹貳參肆伍陸柒捌玖拾一舛音蒸日本外字音大誤蓋
云十合也因字形相似歟
 とあるだけ。弘治二年本類で数量としているような語は、言語門の最初に、
 △言語 一位一種一瓶一同一途一統天下一辺(下略)とまとめてある。
 ハ部のは、八音・八宗・八苦・八功德水・八福田の諸語である。
 ニ・リ部は、それぞれ二王・六義だけ。

永禄十一年本、弘治二年本、図書館本では、八音、二王などは附録の中に入っている。

まだ、系統のことにはふれていないが、この本の系統でいうと、ヲ部にも数量門がある筈であるが、見当らないのは、筆写の時に落したのかもしれない。

古本節用集系統図



イ部の最初が、印度で始っているから、『研究』の分類に従うと、印度本である。

『研究』の印度本の系統図（一部省略）は、上図のとおりである。『研究』は、大正5年刊行であり、その後世に出た古本も多い。（山田忠雄「橋本博士以後の節用集研究」国語学第五輯昭和26年2月、川瀬一馬「古辞書の研究」昭和30年11月、山田忠雄「川瀬一馬氏著古辞書の研究」（書評）国語学第26輯昭和31年

10月、以上参照のこと）この系統図も補正しなければなるまい。（これに関しては、山田忠雄氏にその準備があると聞いている。）

さて、この慶長九年本は、この系統図のどのグループに属するのであろうか。

弘治二年本類と比較してみよう。門数は、この類は15門あるのに対して、13門である。楽名という門名こそないが、八部には、抜頭以下の語を収めてある。この類では附録としてある語が、本文の中に入っていることは前にふれてある（前ページ10行目）。さらに、註についても、全体に簡単である。以上の諸点から推して、慶長九年本は、弘治二年本類に属しないと考える。

そうすると、永禄二年本類になる。まず、第一種の永禄二年本（大阪府立図書館蔵）と比較してみよう。

この種の本の、もっとも特徴的な個所は、人名門に、画家名が多いことである。

テ部人名を例にとってみよう。

猪頭蛭子 張良 ^{ヂキフ} 陳士元 ^{チンシケン} 張子恭 ^{チャウシケン} 定山 ^{テイサン} 中和 ^{チュウワ} 仲穆 ^{チュウモク} 陳所翁 ^{チンシヨウ} 猪者 ^{チュウシャ}
^{チヤウハウシヨ} 張芳汝 ^{シタン} 張思訓 ^{チヤウハウシニク} 張芳淑 ^{チヤウケツソ} 張伯洪 ^{チヤウケツソ} 張月湖 ^{チクサイ} 湖 ^{チンセイニイ} 竹齋 ^{ヂヤウテウ} 陳世榮 ^{チンセイニイ} 定朝 ^{テイテウ}

これが永禄二年本である。（註は省略してある。以下もこの例にならう）

慶長九年本では、

猪頭蛭子 張良 定朝 千葉 秩父 中条 長千石

となっている。その差がいかにまはっきりしている。リ部人名門でも、画家名17名の差がある。

また、『研究』176ページに挙げてある比較表を借りよう。

	村井本	永禄二年本	堯空本 兩足院本	慶長九年本
一紀の註	十二年イ 十二月云	十二年云	十二月云	十二年云
碓	イシタ、キ 碓 イワハト 異本		イシタ、キ 碓 イワハト 異本	イシタ、キ イワハト 碓 異本
八仙人の註	李適之 子イ	李適之	李適子	季適子 マ
傍若無人の註	猛イ 桓温貴者也	桓温貴者也	(堯) 桓猛貴者也 (兩)温 桓猛貴者也	桓猛貴者也

このようになる。なお、『研究』の、「貴人也」の、人、は、者、の間違いであるから訂正しておく。

前述の人名門の語の出入と、この表とから、第一種ではないと断定できよう。

第三種と比較してみよう。この種の本の特徴となっている、ケ・サ・キ・セ部の楽名門は、ヲ部までしかない慶長九年本では、比較しようがない。つぎに天地門に名所名が多いという点についてはどうであろうか。例えば、経亮本

(京都大学附属図書館蔵)のへ部の、

ベキラノフチ ヘソムラ ヘヒミノ ヘルヤマ
泪羅淵 総村 蛇溝 倍山

ヲ部の、

ヲハ イカワ ヲハラノ ヲハツ サンジヤウジ
大井河 大原野 大津 園城寺

が、慶長九年本より多い。

ただこれだけの根拠で、第三種でないと言うのは、少々薄弱ではあるが特徴として挙げてある語がないという点で、消極的根拠としたい。

最後に残ったのが第二種である。そのうちの両足院本(建仁寺両足院蔵)と堯空本(宮内庁書陵部蔵)との語の異同を調べてみた。語の順序もほとんど一致している。語の出入りについては、以下にその一部を例を挙げて検討するが、一応統制がとれているし、さらに、前ページの比較表も示している。

よって慶長九年本は、第二種に属するものと判定した。

山田忠雄氏は、国語学辞典の、節用集の項で、「最近世に出た慶長九年本(上巻のみ、国立国語研究所蔵)は、この類(廣演註・第二種のこと)の最古本として注目すべき本である」と述べておられる。

第二種に属する堯空本・両足院本両本と比較してみよう。

慶長九年本のイ部人名門を例にとろう。

イルカノダイジン インヅツカウ ①イサナキ ミコト ツシキ イノウヘ イノブ イカハ イセ
入鹿大臣 印月江 伊弉諾□□ 一色 井上 飯尾 飯川 石谷 伊勢

イノシリ イリユ ②イサグウ イハ ③マツ イハ ④ヤマ イノマダ イノハヤタ イノ イキ イガ
井尻 入江 一条 岩 松 岩 山 猪俣 井早田 猪谷 臺岐 伊賀

イナ イサイソ ⑤
伊奈 市磯

①に伊藤 一澤 欄外に板坂 磯谷 今川 今村

の語が入るのが、両足院本。

くされているようである。さて、慶長九年本のニ部支躰門に、^{ニキビ}胞癩^イとある。兩足院本も同じ。ところが、堯空本には、^{ニキビ}胞癩^イとなっている。慶長九年本のイ本は、堯空本らしい。

これらを総合して、わたくしは、堯空本→兩足院本→慶長九年本という成立の順序を考えている。前述の山田忠雄氏の、「最古の本」と正反対の結果になった。これは、「量」だけからの結果である。「質」を忘れての謗は覚悟している。イ部人名門の、あまりにも統制のとれた語の出入りは、その「質」に係わるものなのかもしれない。

成立の順序から離れて、三本の相違を見よう。八部樂名門は、堯空本では、
樂名 ^{ハトウレウ ケン ラクナソ リサイシヤウラウ}拔頭陵王還城樂納蘇利採桑老^{已上五者樂舞余者略而不記}

兩足院本は、

樂名 ^{ハトウレウ ワウケンシヤウラクナソ リ サイシヤウラウ}拔頭陵王還城樂納蘇利採桑老^{已上五者樂舞余者略而不記}

この本では、

^{ハトウレウ ケンシヤウラクナソ リ サイシヤウラウ}拔頭陵王還城樂納蘇利採桑老^{以上五者樂舞余者略而不記}

と、門名なしに、八部食物門の最後に付けてある。以上五者樂舞云々の註があるものが食物である筈はない。これは、筆写の時に門名を見落し、陵王以下を、拔頭の註とこじつけて八部に入れたとしか考えられない。そういう目で見ると、どのような写本にでもある筆写の時の間違いはある。^{イトケナシ レフレカ}幻、孰興、八部艸木門に、^{フヨウ}芙蓉があるのは、よみは、ハチスで、註がフヨウなのである。

参考までに、註として出している出典を列挙しよう。

韻會 博文錄 伯母集 日本紀 法華經 梵網經 本說本帥 平家 東坡石鼓歌 朝說 類篇 類說 韓詩 退之詩 漢天文志 曆側 万葉集 太平御覽 大般若音義 雜五行書 山谷句 參州風土記 左傳 史記 新撰万葉集 雌鳴節 事文類聚 十三經 事林廣記 尙書 集韻 易經 文選 毛詩 淮南子 莊子 酉陽雜俎

イ部言語門に、^{イミンクソロ イマカウトツホニソロ}繁敷候・今擲覺候などがあるところをみると、出典には往來物があってもいいようである。

よみは、原則として、右側にかたかなで付けてある。時には両側に付けた例もあることはある。

イブカシ	ニハ	ニジ	ニジ	ホラ	ホルハ
不審	庭	缸	覓	洞	惘然
フジン	テイ	コウ	グイ	ドウ	バウゼン

この例は、二つのよみが行われていたが、通則からいって右側が一般のもので、左側は特殊なよみであったと考えてさしつかえあるまい。この例では右は訓で、左は音である。

バイバイ	インシン	ニョウ	ボウフウ	ホンソウ
賣買	音信	二	暴風	奔走
ウリカウ	ヲトツレ	ランマロハス	ニワカ	ハンリハシル

右の音は普通のよみで、左側の訓は特殊なよみ。これらの外に、

ヘイハウ	ボウシ	バンヤ	チン	ツウ	植穀作
兵法	帽子	婆婆	亭	生	
シヤウホウ	モウス	サ	テイ	ヲナル	艸木一長

のような例もある。

以下に、この本の資料としての価値というほどのものではないが、目についた語を拾ってゆくことにしよう。はじめに、調査に得た副産物といったものを披露しておこう。村井本（神宮文庫蔵）に、母とよみを付けてあり、堯空本に擿とあったのが特に目立ったものである。

では、慶長九年本について。全体をながめてみると、他の本よりは、濁点を多くうってある。といっても、当時の音に忠実であるということではない。当時の語の清濁をこれから決めることは危険である。しかし、濁点がないから清音だったとは決められなくても、濁点のあるものは、一応濁音だったと考えてみてもさしつかえはあるまい。

ニハタツミ	ニハタヅミ	ホト・キス	ホト・ボス
潢潦——潦	鸚鳥——鸚	鸚	鸚

の例を見ればわかると思う。

①現在では濁音ではよまない語

ヘダノ	バウマン	ルイザ	ワギ	ランデキ	ワモバニキ	ヘンガイ	ドウボウ	ボウユウ	ドンシヤク	ヂンチヤウケ
秦野	飽満	櫻茶	隠岐	怨敵	面煩	変改	同朋	朋友	貧着	沈香華
チダイ	リヤウジャウ	ワモンバル	ボンデン	バンゲイ						
遲怠	領掌	慮	梵天	晚景						

仮名づかいは、まったく統一がとれていない。もちろん、他の多くの本がそうであるように、イ・エ・オとキ・エ・ヲをそれぞれ同一部に入れているのも（エとエは推測）、字を知る為の字書であるから、それでいいのであろう。

② 仮名づかいの乱れている例。

イモフト イキドツリ イキアイ イスツアモノ ホウ ヒトハライ ニツコトハラウ フホモリ ワ、バ イクハン ハンクワン
妹 憤 勢 犬追物 類 一笑 莞爾笑也 大森一大庭 衣冠一判官

節用集の原著者は、建仁寺の僧であろうというのに落着いているようにも思える。それでか、漢語のよみの今日と異なるものが多い。

③ 現在慣用のとよみの異なる語

イウジヤク ロ フ ハツヨウ ハツキヨ ボウシ ホイタク ボウタタ ホンギヤク ヘンガイ トウシヤウ ドウジヤウ
幼若 鹵簿 末葉 発語 帽子 陪堂 夢澤 反逆 変改 灯明 動静
チロウジ ギロクセ リウスイ リンニ ワンゼン
停止 濁世 立錐 輪廻 遠近

よみに当ててあるかなの音価を推定することが、まず先決問題ではあろうが。

④ 音韻史の資料として興味のある語。

イカルゴ イネフ バイゼウ バツ ハラヘ ハヤシ ハゴクム ハキノウウ ハンベル ホウシ ボウタク ホンダ
鰯 囲繞 陪従 罰 靨 拍 育 掃拭 待 法師 夢澤 反故
バチ ハライ ヒウシ
トツサカ ドクロウ トブラウ トウサフライ ドツクワツ チイロ リツス ノンドノヤマイ リンニ ワモツカナイ
鶏冠 髑髏 訪 遠侍 独活 千尋 栗鼠 喉病 輪廻 窞 (cf.
ワボツカナシ ソツド ワメク ワンヂキ ワ、カメ
不窞) 越度 喚 怨敵 狼

⑤ 現在では、もう耳遠い感をもつようになってしまった語。

フキロコトガラ ハタル ハキノル ニギメク
躋 亥柄 微 (この本ではハグルになっている) 糞 ～メクの形の語(糝)
イゴメク ハタメク ハタメク トチメク
颯悠 矚 髭髭—堯空本ではト、メク 迷囈)

節用集を読んでいると、じつに楽しい。少しも古い時代の字書という感じはしない。こんなことばを見てはうれしくなってしまう。

チトバカリ ココウ トリワケ ニコヘ トサマカウサマ トニモ トト 倭国小児女呼魚曰斗々朝説曰
屑 許 股肱 特 颯然 左 右 カクニモ 斗々 南朝呼食篇頭呼魚為斗本此乎

民衆の中を、キャッチボールのボールのように、あちこちと勢いよく受け渡されてきたことばに、じかにふれているのだという感じが、ひしひしと身に感じられる。これは、少々余談に互るが、流求^{リウキウクワイロク}外国 琉球は、いまの日本の姿勢からみて、ちょっとかくしておきたい気がしないでもない。

節用集には、俗語が多く入っているという。

⑥俗用などと明記してある語。

ヘツフ 世俗用 (註・神様への初穂) 下手 日本世 俗話 牡丹 日本俗日 二十日艸

ヘウイツ (前略)
放逸 日本俗或云= 放埒 不順法度如= 生馬、一レ 一也

ニンゲンバンジサイワウカムマ (前略)
人間万叟塞翁馬 世俗口号吟= 此句= 豈云レ 無レ 意義哉

当時の生活を知る上にも多くの資料を提供している。それは、財宝門食物門などに多い。大鋸ヲ ガは有名である。土瓶ド ボン・鎔鑄イ カタ・濁酒ジヨクシユ・盤若湯ハンニヤタウ・法論味噌ホウロン ミソ ニヨリサケ奈良一ホシイ糶テ時出之ハ糶ハ飲ハなどはおもしろい。

全体の四分の一でしかないこの一冊の節用集からでも、国語史の研究に多くの問題を引き出すことができる。今まで疑問にされていたことの解決の緒を与えてくれるものも潜んでいそうである。

このような宝の山に入りながら、今までの節用集研究は、ともすれば古本こほんを探し出して、その書誌的研究で事終れりとしていた傾向が強い。かく言うわたくしも、どうもその弊に陥ったものようである。「書誌的研究はもちろん大切であるが、とかく国語学の力の弱い者は、すぐ書誌に逃げて行ってしまう。それは、もっとも戒めなければならないことである」との、卒論の口頭試問に際しての恩師遠藤嘉基博士のことばは忘れられない。

この稿を終るに当って、貴重な調査資料の披見を快くお許しくださった山田忠雄氏、我儘なわたくしに惜しみなく分け与えてくださった古本こほんの所蔵者、研究所の方々、とくに近代語研究室員の方達の好意に、ここであらためて心からの感謝のことばを述べたいと思う。(昭和33年11月3日・文化の日稿了)